

◆特集 雑誌のゆくえ◆

雑誌のゆくえ

松下 茂

抄録：電子ジャーナルの登場で、二次情報データベースからのリンクを通じて論文に直接アクセスする傾向が加速した。またオープンアクセス誌の登場は冊子体を持たない電子ジャーナルだけで提供するスタイルを定着させつつある。論文単位での評価システムも登場することで、雑誌へのアクセスから論文へのアクセスへの傾向が強まっている。しかし、論文品質の維持や評価のためには査読が不可欠で、それは主題別の雑誌という枠を必要としている。

Key words：電子ジャーナル、学術雑誌、コンソーシアム、オープンアクセス、査読

I. はじめに

「雑誌のゆくえ」という表題を編集員から頂戴した。恐らくこういったテーマを頂いたという背景には、学術研究の分野で電子ジャーナルが普及しその利用が進んできた中で、果たしてこのまま冊子体として発展してきた雑誌という枠組みが残るのであるかという疑問の結果であろう。なぜなら少なくとも電子ジャーナルにリンクされたデータベースを利用する読者は、データベースの検索結果から全文を直接読むことができるので、その論文がどの雑誌に掲載されたものであるかを意識しながら読むことは少ないかも知れない。むしろ誰が、またはどの機関の所属者が論文を執筆したかのほうに関心があるであろう。そこでこの難解な疑問に一定の結論を出すために、筆者は、学術誌の果たす役割、雑誌論文へのアクセス方法の変化、に注目しながら今後の姿を考察したい。

なおここでいう雑誌は、定期的に刊行され

る学術雑誌のことを言う。

II. 学術雑誌の果たす役割

学術雑誌は、学会誌として誕生した。学会誌が誕生する前には、研究者は自分の発見した知見の先取権を確保するために、その公表手段として手紙を使ってきた。研究成果は、手紙を通じて同僚や同種の研究者に告知された。

1665年に英国王立協会(Royal Society)は、「Philosophical Transactions」という学会誌を発行し、翌年の1666年にはフランスで「科学アカデミー」が創設され、1667年には「Journal des Savants (ジュルナルデ・デ・サヴァン)」がその学会誌となった。これら二つが学会誌の始まりと言われている。

学会誌が誕生することにより、研究者は定期的な研究成果の発表の共通の場を持つことになり、しかも一定の品質管理(査読制度)が行われることで研究成果の権威が保障された。

学術雑誌はもともと学会誌のことを指していたが、近年になって商業出版者も学術雑誌を発行するようになり、また学会誌の出版にも携わるようになった。とくに商業出版社に

MATSUSHITA Shigeru

株式会社サンメディア

matsushita@sunmedia.co.jp

よる学会誌の出版は、会誌の国際化と販売拡大およびそれを通じての学会員の拡大という学会の要望と合致した。国内の学会でも、会誌発行を海外の大手商業出版者にゆだねているところが多い。

商業出版者の学術雑誌は、特定の学会に依存せず主題に即した専門分野で活躍する研究者を世界中から編集者として集め、同様に世界中から投稿記事を集めて出版することで、学術研究成果の普及を担ってきた。

学会誌の流通と販売は、主として学会会員に向けられていることに対して商業出版者の発行する学術雑誌は、主な販売先は図書館である。図書館が主要なマーケットであるという事情は、商業出版者の学術雑誌の価格政策にも大きな影響を与えている。

これら学術雑誌は、研究領域ごとに発行されるので、読者はある主題の学術雑誌を手にとって関心のある論文を読むことで、関連する別の論文にも目を通すことが出来る。その意味で、学術雑誌は文字に凝縮された研究コミュニティの一形態である。

Ulrich's International Periodicals Directory によれば現在流通している逐次刊行物数は約 53,000 タイトルで、そのうちでオンラインで提供されている雑誌は、約 25,000 タイトル、学会発行物は約 11,000 タイトルであった¹⁾。国内でも多くの学術誌が発行されているが、ライフサイエンス領域だけでも国内で最も古い歴史を持つ医学中央雑誌の収載対象誌が約 2,400 タイトルであることを考えれば、その数は非常に多い。

学術雑誌の数が増える理由は、学術研究分野が細分化しつつあることに加えて、学会数が増えてきていることによる。日本学術会議が認定する国内の学会数は、1998 年は 1,236 学会であったが、2004 年には 1,740 学会となった²⁾。その中でも、医学・歯学・薬学の分

野が増えている。

国際的にも学術雑誌の数は増えつつある。先に見た Ulrich's International Periodicals Directory によれば、この 10 年間で毎年 500 近い学術雑誌の創刊が続いている。

III. 電子ジャーナルの普及

1990 年代の後半から欧米の学術雑誌を中心に電子ジャーナルが普及してくると、少しでも多くの電子ジャーナルへのアクセスを保障することが研究図書館の役割となってきた。シリアルズクライシスと呼ばれる図書館の資料購入費のゼロシーリングと学術雑誌の値上げという狭み撃ちのなかで、研究図書館は電子ジャーナルの契約に活路を見出すようになった。つまり電子ジャーナルへのアクセスを冊子体で維持するよりも安価に得ようと努力してきた。その努力は、図書館コンソーシアムの形成でありコンソーシアムによる電子ジャーナルの大量契約であった。一方、売り手側の出版者（とくに商業出版者）は、コンソーシアムによるディスカウントへの対抗のために少しでも多くの雑誌をパッケージにして一括で販売するいわゆる「ビッグディール」を展開してきた。この結果、北米を中心に電子ジャーナルは急速に普及した。

わが国でも 1999 年に日本医学図書館協会が ProQuest の医学系全文データベースを対象とした国内初の電子ジャーナルコンソーシアムを組織した。このコンソーシアムは、後に日本薬学図書館協議会も加わって、医薬系大学図書館の大きなコンソーシアムを形成している。また、国立大学図書館協会は 2000 年に電子ジャーナルタスクフォースを形成し、電子ジャーナルコンソーシアムを推進している。

IV. 電子ジャーナルへのアクセスから論文のアクセスへ

電子ジャーナルの普及は、これまでの学術雑誌の利用方法を大きく変えた。その最大の要因は、二次情報データベースから電子ジャーナルへのリンクである。

その中で最も大きな役割を果たしたのが、PubMed による LinkOut[®]である。それまでも特定の商業プラットフォームで提供される二次資料データベースからは、電子ジャーナルへのリンクが行われるものもあったが、医学系で最もよく使われ、しかも無料のデータベースによる電子ジャーナルリンクの実現は、検索結果からデスクトップ上でそのまま論文にアクセスするスタイルを定着させた。

その結果、電子ジャーナルへのアクセスは論文へのアクセスを指すことになり、利用者にとって個々の電子ジャーナルタイトル(雑誌名)を意識することは少なくなった。今では、電子ジャーナルのタイトル名から個々の論文タイトルをブラウジングして論文へアクセスするという手法は少なくなったという⁴⁾。

また、電子ジャーナルの非契約者も電子ジャーナルの機能の一つである論文単位購入(Pay Per View)を利用することで、契約者と同等に論文へのアクセスが可能になるため、学術雑誌の枠を超えた利用が可能となっている。

V. オープンアクセスジャーナルと機関リポジトリ

2001年に BioMed Central というオープンアクセスジャーナルサイトがスタートした⁵⁾。

BioMed Central は、学術雑誌の新しいビジネスモデルとしてこれまでの購読型ビジネスモデルから、投稿する著者からの投稿費用、機関会員制、学術投資ファンドからの投資に

よるオンラインだけで提供する学術雑誌の創刊を行った。

BioMed Central のオープンアクセスジャーナルは、医学領域と生物学領域のそれぞれで研究領域毎のオンラインジャーナルを創刊している。論文はピアレビューされており MEDLINE にも収載され PubMed からリンクされている。利用者(読者)にはインターネットを介して誰にでも無料で閲覧することができる。

また 2002 年には、PLoS が同様のオープンアクセスジャーナルを創刊した⁶⁾。

現在、オープンアクセスは既存誌でも部分的に行われている。それは発行後一定期間を経過後、または著者の希望により一定の金額(3,000 ドル程度)を支払うことで発行直後からインターネットを通じて無料で公開する方法である。

また PubMed Central⁷⁾のようにアーカイブとして学術雑誌を無料公開する試みも行われており、近く英国版の PubMed Central も創設される動きがある⁸⁾。米国や英国では、税金や公的基金を使った研究成果論文は、6ヶ月経過後に PubMed Central に掲載することを求める動きが出ている。

こういった動きに連動して、機関リポジトリといわれる大学や研究機関でのアーカイブ事業も進んでいる。機関リポジトリはその機関の研究成果を無料で公開しアピールすることを目的としている。

学術雑誌に投稿して掲載される記事もアーカイブの一つである。投稿される記事は、投稿前の記事をプレプリント、投稿後の記事をポストプリントというが、学術雑誌によって著者がプレプリントかポストプリントのどちらを掲載することができるか異なる。

上述のように、学術雑誌は電子ジャーナルの普及とともにその提供の形態、閲覧の方法

などが非常に多様となってきた。

また学術雑誌の著者と読者は、それぞれの立場が逆転する場合もあり、相互の学術論文の引用や参考が基本となった学術コミュニケーションを形成しているので、著作権のあり方にも変化が見られるようになった。とくにオープンアクセス誌では、多くの学会誌や商業学術雑誌と異なり著者が著作権を保有することが前提となっている。

VI. 研究成果とその評価

ここまでは学術雑誌の発行形態、提供方法、価格や著作権についての変化を簡単に見てきた。しかしこういった面以外に、学術雑誌は人類の進歩と発展のために価値のある正確な研究成果を発表できる媒体でなければならないという役割がある。そのために必要なのが、論文の品質であり、それを支える査読制度である。さらにその品質の一つの指標としての引用数や引用率などの調査も必要である。

学術雑誌の形態が冊子体か電子媒体かオープンアクセス誌であるか否かにかかわらず、研究成果はその評価を受けることになる。BioMedCentralもPLoSもImpact Factor[®]を強く意識しており、その数値が上がるごとに大きな宣伝をおこなっているが、一見革新的に見えるこれらのオープンアクセス誌も既存の評価システムに依拠していることを示している。

なおBioMed Centralでは学術コミュニケーションの手で論文の評価を行うためにFaculty of 1000[®]という論文評価システムを運営している。このシステムは、世界中の約4,000名以上の研究者が協力をして、医学生物学領域の雑誌に発行された論文を推薦したり、評価をしたい論文をコメントつきでノミネートしたりする評価システムである。そして論文発表後二年経過しなければ評価が出な

いImpact Factorとは異なり、論文発表直後に評価を行うので速報性があること、さらに同一研究分野の研究者による直接の評価コメントが読めるので、何が評価されたかが明確に分かるという点で画期的である。しかし評価対象の論文が後の研究にどのような影響を与えたかは評価できない。論文の評価には様々な観点からの評価が必要となるだろう。

しかしFaculty of 1000は、Impact Factorのように掲載誌名を基準とすることなく論文そのものを浮き立たせる効果を作っているという点では、二次資料データベースにリンクされた論文と同様に雑誌名よりも論文そのものに読者の関心を寄せる結果となっている。

VII. 雑誌のゆくえ

これまでに述べてきたことを総合すれば、次のことが言えるであろう。

一つは、電子ジャーナルの時代では利用者が論文に直接アクセスできるチャンスが増えてきたので、雑誌タイトルへの意識が少なくなってきたことである。また、既存誌の権威がなくても新しいオープンアクセスジャーナルが一定の成功を修めつつある。

二つ目は、評価システムとして論文を直接評価するシステムが登場してきたことである。これらを総合すれば、これからも利用者のアプローチとしては、論文への直接アクセスが増えるであろう。

一方、これらの論文の品質管理は引き続き重要な役割があるので、特定の研究主題分野の査読者が必要である。また論文を発表する際にもどのような主題分野で発表するかは重要である。したがって同一研究分野の論文発表を査読編集して、一定の書式できちんと二次資料データベースに索引されるようなシステムとしての「雑誌」が必要であろう。学術によって雑誌は、論文発表の一つのプラットフォーム

ムの性格を帯びていくであろう。

参考文献

- 1) Ulrich's International Periodicals Directory.[確認 2006.8]
<http://www.Ulrichswob.com/Ulrichsweb/>
- 2) 財団法人日本学術協力財団. 学会名鑑 2004-6年版.東京:学術協力財団;2004.
- 3) NCBI-PubMed-LinkOut. [引用日 2006年8月10日] <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/entrez/linkout/>
- 4) 愛知医科大学医学情報センター小林晴子: アクセスルートの調査からサービスと管理を考える. 2005年10月7日 平成17年度
- 日本薬学図書館協議会中堅職員研修会
- 5) BioMed Central.[引用日 2006年8月10日] <http://www.biomedcentral.com/>
- 6) PLoS. [引用日 2006年8月10日] <http://www.plos.org/>
- 7) PubMed Central.[引用日 2006年8月10日] <http://www.pubmedcentral.nih.gov/>
- 8) THOMSON.[引用日 2006年8月10日] <http://scientific.thomson.com/free/essays/journalcitationreports/impactfactor/>
- 9) Faculty of 1000.[引用日 2006年8月10日] <http://www.facultyof1000.com/>